

社 會 意 識

銅 直 勇

デュルケムによれば社會意識即ち彼の所謂集團意識又は共同意識 *la Conscience collective ou commune* なるものは、同一社會の成員の平均數に共通せる信仰及感情の總體であり、それ自身特有の生活を有し一定の組織を成せるものである。それは只社會の各個人に於いてのみ實現せらるゝものであるが、然し又個人意識 *la Conscience parti culière* も別個のものであり、廣く社會の全面に擴がつてゐるものである。(Durkheim: *De la division du travail social*, p. 46.) 即ち個人意識以外又は以上に社會意識なる特別の存在を主張するところの——いはゞ社會意識の實在論的見解をとる彼に對して、他方社會意識の唯名論的見解をとるものゝ一人として吾々は彼のスタッケンベルグを擧げることが出来る。彼は曰く、個人より社會を比論して前者が意識を有するが如く後者にも亦社會意識なるものが存在するといふことは出来ない。社會は思惟し感じ意志することは出来ない。吾々が社會意識と稱するところのものは只社會

を成せる幾多の個人に共通なる意識或は社會に關係せる個人の意識を意味するものであり、吾々は只かるゝ意味に於いてのみ社會意識なる term を一の修辭として用ひるに過ぎない也。(Stuckenberg: *Sociology*. vol. I, pp. 164, et seq.)

註、社會意識についての種々なる見解の總覽は、米田教授「集團心理現象の概念及び本質」(哲研第五、六、七號)參照。

今右に擧げる二つの見解を吟味するに二者は全然其の立脚點を異にするに拘らず何れも社會成員に共通なる意識といふことを注意せる點に於ては相同じい。然しスタッケンベルグに於けるが如く社會意識なるものを以つて單に社會成員共通の意識なりと見る見解は果してよく社會意識なるものゝ本質を明にし得たるものといふべきであらうか。例へば正午近きに至れば社會内外を間はす總ての人々皆空腹を感じる。然し social なることは心と心との相互關係そのものである。故に多くの人々の間にかやうに同様なることが意識せられたりとしても、それは各個人銘々の個人意識であつて、未だ以つて社會意識と稱することは出來ない。然るに此時若し心的相互作用によつて各人互に其の感を抱けりとの意識の統一が生じたる時、即此時こゝに社會意識なるものが成立する。ギディングスは、社會心とは多數の個人心が相互作用をなせる結果彼等が同時に同様の感覺又は情緒を感じ同一の判斷に

到達し、且つ恐らくは一致の行動をなせる所の現象である。約言すれば社會心とは個人或は群集の精神的統一である。然も此の統一なるものは決して單なる概括でなく一の Concrete thing であるといつてゐる。(Giddings; Principles of sociology pp. 134. Inductive sociology, pp. 65.)吾々が今このギディングスの社會意識の概念を知る時、彼の社會意識の唯名論的見解をとるスタッケンベルグも亦其實ギディングスと同様な點に着眼して居るを發見する。即ち前に述べたる如く、彼は社會意識なるものを只一の修辭としてのみ用ひようとするにも拘らず、時に又社會が單なる個人と異なる一實在として存在するは行動の統一 united in action 即ち目的及意志の統一に於いてあるといひ、或は又個人との間に存する相互作用や共通なる心的内容の如きものを以つて社會の本質的特徴と考へてゐるのである。(op. cit., p. 165; p. 87; p. 79; p. 101; etc.) ズント亦その民族精神の考察に於いて、恰も個人精神が心的要素の結合及其の結合より生ずる生産物であるが如くに、經驗的意義に於ける民族精神なるものは多くの個人意識の單なる總計でなく個人意識の結合によつて生じたる一種の精神或は精神物理的過程であつて、それは個人意識に於いては全然或は殆んど全く生じ得なかつた所のものであるといつてゐる。(Wundt; Völkerpsychologie I. S. 10.)又タード

はその *Les Lois Sociales*, p. 34 に於いて「個人をして社會的一全體を形成せしむる方向の一致」といひ、又「社會生活の根柢を形成する精神及意志の微妙なる合致或は又一定の時一定の社會の凡ての精神凡ての意志に於ける精密なる觀念目的及手段の極めて多くの相共通せる並存的存在」といつてゐるが、これによれば社會は模倣なりといつた彼も亦個人の意識内容の共通合致を以つて社會的統一の最も本質的なるものであることを認めたるものと云はざるを得ぬ。即ち此等の人々は各其の立脚點を異にするに拘らず其實略同一の事實を注意してゐるのである。即ち社會意識とは社會成員の間に於いて共通一致し且共通一致せりと認められたる共同の意識内容である。然しかくいふことは社會あつて而して後社會意識なるものが存在するといふのでは決して無い。社會あつて而して後社會意識があるのではなく社會は社會意識の存立するところ輒ち其處に存在する。

吾々は曩に社會を以つて共同なる活動への關與であるといつたが、社會意識の成立したるとき輒ちそこに共同の活動が生じ、そこに始めて社會なる心的結合心的統一が成立するといふことが出来る。故に社會と社會意識とは同一現象の相異なる二つの名辭に過ぎず、只前者はこれを多少具體的に見、後者はこれを純粹に心理的に

見たものに外ならぬ。然し經驗科學の對象としての社會なるものは結局心理的性質のものであるが故に後者即ち社會成員の間に於ける此の共通一致の意識こそ實に個人と個人とを結合せしむる社會的紐帶であり又同時にその指導力である。即ち今一度かくの如き統一が成立したる以上そは個人に對して一の客觀的勢力として更に個人を規制し、又かくの如く社會意識に規制さるゝ限り個人は社會の中に生存し活動しつゝあるのである。例へば吾々が日本民族と稱するものは其實同一の祖先より出たるものなりや否今日に於いては最も疑はしき事實であるとしても、少くとも過去の久しき年月の間に於いて吾々は同一の祖先より出で同一の歴史を有するものであるとの共通の意識を懷き來つたことによつてこゝに日本民族なる共同精神共同意識が成立し、この意識この精神の存在する限り又この意識によつて規制さるゝ限り即ちそこに日本民族なるものが存在する。社會意識に於いて特に重要な點は即ちこの共通又は一致せりと認めらるゝといふことであつて、事實共通にあらず又一一致の存在することなき場合に於いてもそが共通一致せりと認めらるゝ時即ちそこに社會意識が存在するのである。このこと既にギデイングスの同類意識の觀念中に明示されて居るが、デヴィスは社會意識の考察に於いて特にこれを

明確に力説した。(cf. Davis; *Psychological Interpretations of society*, pp. 72-73.) 然しデュイス及びデュルケムの如く只共通の意識又は共通なることの意識といふだけでは未だ以つて社會意識の凡ての場合を説明すべく十分であるとはいはれない。スタッケンベルグに於いては共通の意識又は意志自的の統一といふ二つの點に言及して居るけれども二者が社會意識に於いて如何なる關係を有するかに就いては未だ十分なる考察を下しては居ない。今吾々の考へる所によれば社會意識は其の本質として、共通なりとの意識を必要とする場合と、意志又は目的行爲の統一合致を必要とする場合との二つの場合がある。これを明にしようとするれば次に少しく社會形態の分類に就いて語る所がなければならぬ。

即ち社會はその形態の上からこれを二大別することが出来る。單なる親和關係より成る場合と、更に進んで協働關係を生ずるに至れる場合とである。吾々は米田教授の創説に従つて前者を社會圏と稱し後者を社會團體と稱する。

註、親和關係なる語は米田教授の用語による。スタッケンベルグの愛著 attraction キティンカスの同類關係 Comradeship シムメルの *Verstehen und Liebe* さいふに近いけれども更に一層妥當適切なる概念であると思ふ。然し社會結合に於いてこの *intimacy* なるものゝ重要なことを最も早く注意せる學者の一人として吾人はタウイッド・ヒュームを注意することが出来る。(Co.

starecy in friendships, attachments, and intimacies is commonly commendable, and is requisite to support trust and good
 Correspondence in Society, David Hume. Of political Society, Political Discourses—the scott Libraries, p. 250-1.)

即ち或る類似の性向を有し同様なる思想感情欲求又はインテレスを有するある若干の人々の間に於いて、此等の人々が其の性向欲望關心境遇の同様性共通性の相互認識によつて親和し統一せらるゝ時、此等の人々は或る點に於いて互に同一體を成せることを認識する。これ「ギディングスの所謂同類意識又は類似の識認」consciousness of kind. 又 *to be aware of resemblances* によつて成立する *ゲフルゲgemeinschaft* であり即ち前に所謂社會圈なる社會である。そこには未だ何等の目的行爲に於ける合致がなく、換言すれば協働又はギディングスの所謂協力意志 *Concerted Volition* なるものゝ存在を見ず、只共通又は共通と認めらるゝところの意識的統一が存在するに止る。此等の社會に於いてかゝる社會結合を成立せしめ且又これを維持展開して行くところの社會意識は即ちこの共通又は共通と認めらるゝ意識そのものである。ジムメルの言語を用ゆればそれは即ち *Verstehen* 又は *Liebe* に於ける統一である。然しギディングスのいつてある如くかくの如き關係はやがて又其の共通なる意識内容を基としてこゝに共同の目的を生じ何等かの方法によつて一定の多少

永存的なる組織によつてこの共同目的の實現の爲に協働するに至る。即ちかくの如き性質の結合が社會團體と稱せらるゝものである。そして此場合に於ける社會意識は或る特定の目的行爲に於ける社會成員内の合致の意志協力意志である。蓋し曩に所謂「共通」なる語は社會成員が其の思想感情欲求又は境遇に於いて單に共通であり且又共通であることを認めたる場合を意味し未だ此等成員の間に目的行爲の合致あることを意味しないものである。此の二つの場合を包括することを明瞭に表示せんが爲めに吾々は社會意識なるものを以つて、或る人々の間に於いて——それは即ち此の社會意識によつて統一結合さるゝことによつて社會成員として數へらるべきところの——共通一致し且共通一致せりと認められたる共同の意識内容であるといはうと思ふ。

かやうに考へ來る時吾々は社會意識なるものが個人意識以外にあるものでなくして其の個人意識中のある共通一致の部分が共通一致せりと認めらるゝことによつて一の統一ある意識内容として考へられたるものであることを知る。社會意識は即ち唯個人意識の内容としてのみ存在する。吾々は個人心をはなれて社會意識なるものを認識することは出來ないのである。然し今若し社會意識なるものを以

つてそれが個人意識の過程内に於いてのみ存在するものとするならば吾々は如何にして個人意識以外社會意識なる特別の存在を區別するを得るか。かやうに考へ來る時は彼の個人意識以外又は以上に社會意識なるものゝ存在を認めることを欲しない唯名論的見解が眞理であるやうに思はれる。然しそは果して眞であるか。

* 哲學研究第六號一〇四頁前掲米田教授論文参照。

スタッケンベルグは先づ社會意識が個人意識をはなれて存在し恰も個人意識がその荷擔者として個體なるものを有するが如く社會意識も亦その荷擔者として社會なるものを有し社會意識はその社會なる實在の有する意識であるといふ如き見解を排したのは吾人も亦これに同意する。然し社會意識は彼のいへる如く單なる修辭ではない。例へば彼の擧ぐる所の議會の例に就いて考へるに、彼の所謂議案なるものは即ち彼の謂ふところの如く或る個人の草案提議になり其の決議は議員各自の個人的意志によつて決せられたるものに相違ない。然し此等議員なるものは各自皆國家最高の立法機關としての議會なるものゝ議員であるといふ共同なる意識に於いて統一せられて居るものではないか。即ち此等議員は其の議案を起草し提議し協議決議する時何れも常に自己は一の議員であるといふ意識に基づいてな

す。即ち彼等が議員たる限りに於いて彼等の行動を規制する所のものはこの議員なるとの意識であり、又議員がこの意識を以つて議院法の定むるところに準據して行動する限り、即ちそこに亦議會なるものが存在するのである。そは單なる概念でなく又單なる修辭ではない。又單なる部分の總和でもなく全體は常に部分の總和以上の新なる或物である。吾人はヴントの精神現實說に従ひ彼れと共に *so viel Aktualität soviet Realität* 考へざるを得ないのである。スタッケンベルグが彼の所謂 *voluntary association* を以つて *a union of wills* となし又結合及結合せる行動は個人的活動と混同すべく餘りに顯著なる相違があるといひ (*op. Cit., pp. 121-122.*) 又ヴントと同様にコーラスの例を引いて、そが只雜然たる音の集合と異なるものであり、又一の文章が單なる文字の羅列に非ざる如く、社會も亦同様にかゝる行動の統一によつて成立つものであることを認めながら猶且社會意識を以つて只一の *figure of speech* であること主張することは到底吾々の解する能はざるところである。 (*of cit., pp. 165.*) 然しかくの如くにして社會意識なるものゝ存在が個人意識以外に認めらるゝとしたならば、その謂ふ所の個人意識以外とは如何なることを意味するか。社會意識の實在論的見解をとるところのデュルケムは社會意識は個人意識の外にあるものと見た。勿論

デュルケムはこの外在性と共に其の内在性をも注意し、何物も個人意識中に存せずして社會生活中に存し得るものなしと明言してゐる。(Div. Trav., p. 342.) 然し彼はこの内在性よりもかの外在性を重要視し、集團表象は個人表象の關係より生ずるものであるが、然しその一度生ずるや個人意識の外にあつてそれ自身特有なる生活を營む一部分自律的なる實在であるとし、且、その起源に溯る時は始めに先づ集團意識なるものが興へられ、個人心は結局この集團意識の延長に過ぎず、吾等の有する意識諸状態の大部分は人間孤立の状態に於いては未だ見ることの出来ないものであり、全くそれは集團生活をなすに至つて生じたるものであると考へる。(Div. Tr., p. 342.) 即ち集團意識は孤立の個人より生せずして其の集合及結合より生ずるが故に、而してかくして生じたる集團意識は外部より個人意識に自己を押つけ、これに依つて吾々個人の意識状態の大部分が生じたるものであるが故に、集團意識は即ち個人意識の外にありといふのである。然し個人意識と社會意識との間に於いて其の先後内外を論ずることは吾々の採る能はざるところである。即ち集團意識なるものは何時如何なる場合に於いても必ずそれは何人かの意識に於いて存しなければならぬ。それは經驗的事實としては個人意識に先立つものでなくして個人意識と共にあるも

のである。又社會意識の個人意識に對する規制は個人意識の外に於いてなすものでなくしてそれが個人意識の中に働く限りに於いて規制し得、又その社會成員の意識内容として存立し發展せしめらるゝ限りに於いて持續する。然し翻つて考ふれば個人は實に無數の社會の成員として即ち多數の人々と種々なる結合の連鎖の中に於いて始めて能く其の生命を維持發展し種々なる社會意識の規制によつて自己の意識自己の人格を發展するものであるが故に、かゝる意味を以つて個人は社會によつて作られるといつてよいであらう。要するに社會意識は個人意識と別個のものであるが然し個人意識の外にあるものでない。然らば社會意識は個人意識以上のものであるといふことは果して許されべきことであるか。

蓋しデュルケムによれば集團意識は多數より成り個人意識は只一であり、又集團意識は時間に於いて個人意識よりも永續的のものであり空間的にも個人意識より廣く存在するものであるが故に集團意識は個人意識に對して強制力を有し、又それは個人的諸勢力の綜合であり意識の意識^a consciousness of consciousness であり或は又知的道德的秩序の最高實在であるが故に社會は個人以上のものであるとする。(Gehlke: *Emile Durkheim's Contributions to sociological Theory*, pp. 56-38.) 吾々デュルケムのこゝ

にいへる如く社會意識が事實多くの場合に於いて個人意識以上の力を有するを見る。即ち吾人の行爲を支配せる多くの風俗習慣等の如きものは吾々の生るゝ以前よりして既に社會一般の人々の認許サシケンによつて社會を支配し來り吾々は通常之に合するを以つて善とし之れに反するを以つて惡とし或は又其の傳統的趣味を以つて高尚なる趣味として鑑賞する。即ち此等の事實として既に成立してゐるところの一定の思想感情及行爲の仕方即ちデュルケムの所謂集團的事實なるものによつて吾々の多くは規制され教養されて居るのである。若し我等にして之れに違背せんか我等は只その社會より退脱するか或は又これを破壊して自己の欲するまゝの新なる社會を作るか二途其一に出づるの外なく且又我等の生れながらにしてその中に生れ込みたる自然社會の如きに至つては苟も其生を欲すれば我等は殆んどこれより離脱するの自由を有せず此等社會に既に事實として妥當して居るところの社會意識なるものを或は自ら是と信じて遵奉し或はこれを信せざるも一身の利益便宜の上よりして姑くこれに服従しなければならぬ。然し吾々はこの經驗的なる社會意識そのものからして直ちにそれが個人意識に對して常に優位なるべしとの規範性を導出すことは出來ない。事實に於いて如何なる規範如何なる社會意識が

常に社會の人々に妥當し又此等の人々を拘束するかといふ問題と、理論上如何なる規範如何なる社會意識か妥當し又吾々が如何なる社會意識によつて拘束せらるべきものであるかといふ問題とは自ら全く別個の問題である。價値の根源はかくの如き經驗的事實としての社會意識に存するものでなくして實に先驗的なる規範意識そのものである。社會の進歩文化の發展はかくの如き價値意識の創造によること甚だ多いのである。故に事實としての社會意識は多くの場合又少くとも原始時代に於いては殆んどさうであり又さうであつたとしても、それは何時如何なる場合に於いても必ず常に個人意識を規則すべき權力又し得る威力を有するものではない。決してない。即ちかゝる意味を以つて社會意識は個人意識以上のものではない。然し吾々はこの個人意識以上なることを他の意味にも——即ちこれを數量的にも解し得る。

今ゾントの創造的綜合の原理によれば精神現象は物質現象と異り全體は其の部分の總和以上の或物である。故にこの原理によつて解すれば個人意識をその要素として生ずる社會意識は當然個人意識の總和以上の新なる或物を有するものといはねばならぬ。ゾントと殆んど同様の論法を以つて個人意識の成立をその諸要素

の結合又は關係から解き、又集團意識の成立をその構成要素としての個人意識の關係又は結合より説明するデュルケムの場合に於いても、その所謂個人意識以上なることをこれと同様にも解釋し得られるであらう。思ふに此の問題は謂ふ所の個人意識なるものを如何に解釋するかによつて賛否何れにも決することが出來よう。即ち今若し吾々が此の場合に於ける個人意識なるものを以つて個人意識の全内容を含有するものとして解釋し、且又社會意識なるものを以つて個人意識に現實に働きつゝある意識内容であると考ふる時は、社會意識は決して個人意識以上に豊富な内容を有するものでない。即ち社會意識は個人意識の總和以上のものでなくして之れ以下のものである。社會は人と人との結合である。然し人格と人格との完全なる而して又永久的なる結合といふ如きは只一の理想又は規範としてのみ存在する。地上に於いては未だ嘗つてかくの如き理想の社會は出現せず恐らく未來に於いても永久に完成せられないであらう。吾々の最も親しき父子夫婦親友の間に於いてすら此等の人々が其の思想感情行爲の全體に於いて全人格的に理解し融合し合一するが如きは殆んど絶無といつても不可でない。此等親和關係の上に立つ社會結合に於てすら猶且然り、彼の一定の目的の爲めに結合する目的社會に於いて

は人と人とは殆んど只其の特定のインテレストの一點に於いてのみ結合する。この無數の多元的なる諸社會——勿論此等相互間には若干の統整があり又完全なる秩序があるべきであらうけれども——の錯綜中に於いて現代ほど目的社會の多い時代はない。少くとも近代に於ては人はその意識の全内容を以つて結合せずして唯或る特定の意識内容特定の關心に於いてのみ他と合離する。經驗的事實としての即ち社會學の對象としての社會の構成要素は人でなくして實にある特定の意識ある特定の關心インテレストである。従つてかくの如き特定意識の結合より生ずる社會意識は個人意識の總和以上でなくして寧ろ總和以下のものである。個人は己が心にかつ消えかつ現るゝさまゝの社會意識の徂徠するまゝに、又これより起さるゝ言動の一々の動きのうちに、恰も小鳥が終日たえまなく樹間を涉りあるくが如く其の屬する無數の社會に絶えず出入して居るのである。個人意識は實に無數の社會意識をそれ自身の中に包有する。

然し今個人意識と社會意識との關係を動的に見て即ち社會意識が個人意識から成生する過程を見且意識なるものは常に吾々の意識の注意の一點に統一さるゝもの即ち吾人の意識の焦點に映するものは常にたゞ一つの意識内容であつて爾餘の

意識内容は其の周圍に圈暈として結びつけらるゝものと考へる時は、吾々は又社會意識を以つて個人意識の總和以上の新なる或物であるといふ見解にそのまゝ賛成することが出来る。例へばこゝに一の工場があり其の職工は等しくその賃銀に對して不平なる時一人あつて同盟罷業によつて賃銀引上の目的を達せんことを全職工に提議し總員直にこれに賛成して一致の行動に出でたとせよ。即ち其時以後同盟罷業の實行といふ一の社會意識が彼等の間に成立し活動して居るのであり、この同盟の成立によつて職工團は従前に比して新なる威力を加へて来る。そしてこの社會意識は其の發案者の提議と全職工の賛成實行があるまでには未だ以つて存在しなかつたところであつて、即ち此等職工各個の個人意識の總和以上の異なる或物である。蓋し或る一の精神現象に於いてはその要素の單なる總和以上の異なる或物が加はつてゐるといふことは、其の新なる或物が加はることによつて分量的に總和以上になるといふことでなく、其新なる要素中に前要素の全體が包攝せられたれることを意味する。即ち之は全然性質的に考ふべきものと思ふ。即ち社會意識は個人意識に共通又は相一致せる而して又共通一致の意識を伴へる意識内容を以つての故に又社會成員のある一人にして社會の外に消え去るとしても只これのみ

によつて社會意識全體が消滅することなきが故に、而して社會意識が一度成立したる以上は事實多くの場合に於いて個人意識を規制するものであるが故に、而して吾々は只かゝる意味に於いてのみ社會意識を個人意識と異りたる或物であると考ふるのである。

以上吾々は社會意識の本質の一般的説明を試みたが吾々は尙こゝに論じ残される或る一の重要な問題について考へる。即ちそは社會意識が社會成員に共通又は一致し且つ共通一致せりと認められたる意識内容なりとするならば謂ふ所の社會意識なるものは社會成員の如何なる數に於いて共通し又一致することを意味するものであるか。蓋し吾々は社會意識の存する所そこに社會ありと考へ、且、凡ての社會的なるもの、根本要件を以つて心的相互作用であるとするが故に、吾人は言下に社會意識の共通性又は一般性は社會の全成員に於ける共通一致であるといふべきであるが、然し例へば經驗的道德の如き一の社會意識に就いて考ふるにそは必ずしも社會全成員に共通のものではないやうに思はれる。即ち社會全員の考ふるところ必ずしも常に善でなく、世擧げて之を非としても我獨りこれを是とし其の信する所を守つて敢て遷らぬどころ即ちそこに道德の尊嚴がある。かくて或る一の思

想信仰道德が社會内に於いて種々なる反對に遭遇することは何れの時代何れの處に於ても吾々の寓目するところの事實である。思ふに社會意識が社會成員の全體意識なるか又多數意識なるかの問題について特に注意したる人は彼のデュルケムである。たゞ彼のこれに對する見解は或は時に全體意識であると見或は又多數意識であるとし前後統一を缺いて居るやうに見受けられる。即ち彼は明瞭に社會意識は社會の全面に擴がり又社會の全成員に共通なるものであるといつてゐるが、(p. Cit. p. 46; 9); etc) 然し又集團意識は同一社會の平均數に共通なる信仰と感情との總體であるともいつてゐる。(op. cit. p. 46) さうしてこれは彼の自殺論等に於いても屢々くり返し述べられて居る所である。然しこの二つの相矛盾せる見解は果して何れが眞であるか。

吾々は先づこれを社會圈の場合に就いて考へる。蓋し社會圈とは前に述べたる如く互に共通なる意識内容を有せりと認められたるある人々の一團であるが、こゝに所謂共通なりとの意識はその圈内全部に共通一貫せるものと考へられたるものであることは明である。即ち之は常に共通し又共通せりと考へられたる限りに於いて一の社會をなせるものである。然し更に吾々がこれを社會團體について考へ

るにこの場合に於いてはこれを二つに分けて考へることが出来る。即ち第一の場合に於いては社會意識が現實に社會成員全體に共通なる場合である。例へばこゝに一學校を考へんに、この場合に於いては即ち優良なる人物の養成といふことに於いて學校全員の意志の一致がある。之は校内全員に共通なるところの社會意識でありこの意識によつて教師も學生も統一され學校なる一の社會團結が存立維持され同時に團體成員は凡てこの意識に規制せられこの意識に規制さるゝ限りその團體の眞實なる構成員となる。然し更に進んで如何かこれ優良なる人物を養成する所以と問ひ來りこゝに學校精神なるものが論議されたとする。然るにこの學校精神なる社會意識は必ずしも校内全員に於いて意見の一致を見ない。或者は秩序といふことを以つて校風の根本精神であるとし、又或者は自由を以つて眞に優良なる人物を養成する所以であると考へる。即ち優良なる人物の養成といふ社會意識は具體的内容なき意識であるが故に個人意識が其の一々の特殊の場合に應じてこれにある内容を與へんとするに當つてこゝに社會意識の複雑なる分化發展が行はれ、かくして生じたる意見又は意識の同異によつてこゝに同一社會内に所謂黨中更に黨なるものが分立する。これ等のものは即ち相争ひながら猶同一社會の成員をな

す。即ちそこには高次の一社會とより低次の相對立せる數個の社會なるものが出現する。社會意識の一般性が社會成員の全數に於いてあるか若しくは又その若干數に於いてあるかは、この高次低次の二種の社會と、基本的社會意識とその發展としての社會意識との區別について考ふる時は直ちに解決することが出來ると思ふ。即ち基本的社會意識は高次の社會成員全部に共通であり、發展としての社會意識は高次の社會成員の大多數又は平均數或は又時により少い數の成員に共通であり、又同時に低次の社會の全成員に共通なるものといはねばならぬ。かくの如くにして社會の容量と密度が大なれば大なる程又その存續が久しきに互れば互る程社會意識は益々分化して動もすれば社會成員の間に意志の分裂衝突が起りこれが爲めに社會の動搖を將ち來す。かくて其の極るところは結局反對者の降服か和解か脱退か除斥か若しくは結合そのものゝ分裂瓦解か其の何れかの一に歸着しなければならぬ。しかも一の社會意識が他の意識を征服してその結合を統一しても時々新なる狀況の變化は必ずしも永久にこれを衝突なき状態にあらしめない。

かく考へ來る時吾々は統一的なる社會意識の存在に對する彼のジムメルの有力なる否定説を想起せざるを得ぬ。即ち彼のいふ所によれば精神過程はたゞ個人に

於いてのみ存在する。故に個人心理過程以外又は以上に社會心理的過程なる特別の過程が存在し従つて個人心理過程の創造者及荷擔者として個人心が存在すると同様に此の社會心理過程の荷擔者及創造者として社會心社會意識時代精神等を一の實在的生産的なる勢力として考へる如きは謬見である。然も吾々は今法律及慣習言語及文化宗教及生活諸形式等が依つて以つて成立し且存立する所の具體的精神的過程とそれ自身獨立に思惟せられたる觀念的内容とを區別する時は以上の如く個人以外に特別なる心理的過程を認めんとする如きこの神祕主義を一掃することが出来る。勿論此等のものとてそは只歴史の上に於いてのみ實現さるゝものであるけれども、然しその獨立自全にして非依他的なる内容に於て考ふればそは歴史的でなく只觀念的なるものとしてのみ存在するところの特別なる一部類である。即ち此等のものは歴史的心理的實在でなく個人心理的のものでもなく社會心理的のものでもなく只客觀的精神的なる内容である。このこと恰も判斷の論理的意義が只心理的活動内の内に又心理的活動によつてのみ一の意識實在性を得るものであるに拘らず其の論理的意義そのものとしては全く心理的のものでなくして其の論理的妥當性はそが意識さるゝと否とに拘らず客觀的に存在すると同様である。

此等のものは其の現實なる起源より見る時は勿論個人心理的のものであるが然しそが心理的歴史的である限りに於いてそは多くの精神的統一體の相互作用によつて變動し其間に何等の統一はないのである。若しそが統一的のものとして考へらるゝ限りに於いては彼等は何等の心理的起源をも有せぬ一の觀念的内容 *ein ideeller Inhalt* である。(Simmel; *Exkurs über Sozialpsychologie-Soziologie*, S. 421. ff.)

以上はジューメル（Simmel）の社會意識に對する極めて大體の意見である。即ち社會現象の本質的特徴を以つて心的相互作用と考へ而して經驗的意義に於ける統一なることを心的相互作用といふこと以上に觀念することなき彼の根本的思想よりすれば經驗的心理的事象としての社會現象は心的相互作用によつて多少の程度に於いて變動しその間に統一なるものは存在し得ず、そが統一的のものとして考へらるゝは只觀念的なる内容そのものに外ならぬ。故に今この見によつて考ふるれば經驗的事實としての社會意識にして事實社會の全成員に共通なるものなくそは常に個人意識の相互的作用によつて動搖變化を免れぬものと考へられる。而してこのことは吾人が前段に於いて例示したる如く大體に於いて眞である。即ち前に述べたる如く發展としての社會意識は必ずしも社會の凡ての成員に共通なるものではない。

或場合に於いては社會の全成員に共通であり或はその大多數であり或場合に於ては寧ろその少數者に於いてはもある。然し社會成員の間にはその有する社會的信仰思想感情等に於いて多少の程度に於ける不一致非共通性を有すとしても彼等が苟も同一の社會成員である限り彼等の間には更に根本的に一致し共通せるものがある。而してこは社會の全成員に普遍なる意識である、全員一致の意志である。何れの社會團體たるを問はず各の團體の凡ての成員は常に共同の生存共同の主張最も一般的なる言葉を以つてすれば即ち共同の活動といふ共同なる一意識の下に結合して居るのである。この根本意識の發展としての社會意識が人により時により處により如何に特殊開展をして分裂衝突したとしても此等の社會意識の根柢には常にこの根本的なる社會意識がその指導力として働いて居るのである。そしてこれある限り彼等は黨中互に黨を分つて争つても尙この共同なる意識の下により高次なる社會の成員として統一される。故に吾々はジニメルGuinierの如くそれが心理的歴史なるものなるが故に統一的であり得ず又統一的なれば之は非心理的觀念的のものであるといふパラドックスに同意することは出来ない。彼はブレンタノBrentanoやマインングMeinongの如く意識現象を作用と内容とに別ち後者を以つて非心理的觀念的のも

のと考へて居るやうであるけれども彼の所謂内容なるものは決して心理的であり得ないことはない。即ち今表象を三分して内容なるものを非心理的超越的な對象の意識内に現れたるものと見る見解に従ふならば彼の所謂内容なるものも猶心理的のものにと考へても差支あるまいと思ふ。故に吾々は社會の全成員はかくの如き共同意識社會意識によつて心理的に統一されて居るものと考へる。然し問題は更に殘る。即ち吾々が更に深くこれを追究して考へる時かくの如き社會意識共同意識の據つて立つ所の根柢に吾々は尙何物か存在して居ることを思はしめられる。即ちあらゆる社會結合の根柢には彼のカントの所謂先驗的自我の如きものが横つて居るのではあるまいか。社會が關係であり且又結合統一であり共同の活動であり、その社會を成立せしむる根本的の社會意識なるものが亦結局社會全成員共同の意識であるとするならば吾々は是非とも凡てこれ等の成立を可能ならしむるところのものが何であるかの問題を明にしなければならぬ。思ふに社會學が經驗科學である限り社會及社會意識の心理的成立過程の研究は甚だ重要な問題であることは勿論であるとしても社會學がたゞこゝに止るならば社會學は彼の心理的因果の圓環連鎖の軌道の上に於いて動もすれば五十歩百歩の争をくり返すに止り社會

構成の原理は永久に解決することが出来ないではあるまいか。社會意識について論ずべきことは尙甚だ多い。私は只その一般的性質につき今二三の考察を記したに止る。(完)